

「愛猿記賞」【佳作】

「いのちの贈りもの」 北海道 金泉三恵子

ここは、どこなのだろう。真っ暗闇の世界が広がっている。横たわっているようだ。何も見えない、聞こえない。手・足・体は付いているらしい。そっと、手を上げてみる。「痛い。痛い。痛い。」頭から足の先まで激痛が走った。「生きている。私は生きている。」

朝、息子夫婦に見送られて手術室に向かった私。左手には点滴棒、右手は夫と手を繋いでいた。足首まである手術着は、緑と白の格子模様でお揃いだった。手術室の入口は左右に別れていた。

「頑張るんだよ、生きるんだよ。」

夫の言葉に頷いて、左側の手術室に入った。

手術室では、手術着から眼だけを出した医師が、両手を大きく広げて迎え入れてくれた。私はスリッパを揃えて置き、手術台に乗った。目が覚めた時に痛かったら、私は生きていると、心に定めて静かに目を閉じた。

「始めるよ。」

遙か遠くに医師の声が聞こえた。

夫は六十九歳。私は六十七歳。腎臓に難病があり、移植手術で、夫の腎臓を受け取らなければならなかった。夫はA型・私はO型で、血液型不適合だった。手術前二週間かけて、不適合を解消する為の血漿交換療法を受けていた。

移植手術が始まって麻酔が覚めるまでの十二時間、私は耐えて生きたのだ。手術後は、生きているから痛い・痛いと言いながら、生きている実感を噛みしめた。麻酔の副作用で、頭を動かすと猛烈な吐き気に襲われた。吐いて吐いて、吐いた。痛いのも吐くのも全てが、生きている証だった。

手術後初めての食事に、スライス・リンゴと小さな海老の天ぷらが盛り付けられていた。じっと、見つめていた私。真一文字に結んだ口唇に涙が伝わって落ちた。次から次へと流れ落ちた。

「どうしたの。何があったのですか。」

医師が血相を変えて、飛び込んで来た。

「大丈夫。嬉しいんです。嬉し泣きです。」

腎不全であった私は、二年前からカリウム・たん白質を制限されていた。手術が成功したので、食べられなかった物が食べられるようになったのだ。嬉しかった。特に、海老天の海老の尾が好物で、夫から貰っていた。

「海老のしっぽ、あげるよ。」

隣のベッドから夫の声がした。

手術が無事に終わり麻酔から覚めた夫が、「妻は、妻は大丈夫でしょうか。」と、縫合したばかりの傷口を手で押さえて、痛みに体をくの字に曲げながら、聞いたそうだ。長年の看護師生活の中でも、忘れられない光景だったと、話してくれた。

病室の隅々まで明るい太陽の光が届いていた。隣で気持ち良さそうに寝ている夫の顔が輝いて見えた。私の体には夫から受け取った腎臓が動き始めていた。夫は腎臓が一つになった。夫と私とで一对の腎臓なのだ。夫からの“いのちの贈りもの”を大切に、これからの残された人生を二人で歩いて行きたい。